



エラーモデルの効果的な活用法

エラーモデル……間違ったモデル

「こまを楽しむ」本文と、エラーモデルを比較することで、筆者の優れた書きぶりを見つけるという意図がある。

間違い方が顕著なエラーモデルがあると、比較をし、良い箇所を見つけやすい。読み手にとって分かりやすい文章とは何かを考える内に、書き手の視点に立つことができる。分かりやすい書き方のコツを子どもが自分自身で見つけ、文章を書くときに生かせるようにする。

板書

板書はキーワードを共有するための掲示板である。教師のねらい、願い（身に付けさせたい力）にせまる発言を記録する。

子どもの発言⇒別の子どもに返す

「たしかに」「なるほど」など共感・聴き合いの力が身に付いてきた子どもに「たしかにって言ったよね、どういうこと？」

子どもの発言⇒発言の根拠を探る、掘り下げる

「(本文の)どこからそう思ったの?」「どうしてそう思ったの?」

「本時の目標と指導事項」

説明文では「段落相互の関係性(構成の決まりまどに関わること)」や「考えの形成(子ども自身の考えを作ること)」などの指導事項があるため、本時の目標と授業展開が一致しているかを再度確認して単元づくりをする必要がある。評価にもつながり、その時間でなにを考え、何ができるようになったかの見取りになる。

要約

書き手の視点を意識し、要約できるようになる！指導例

例 ○年○組のニュースをキャスターとなって読み上げよう。

T 何が必要でしょうか。

S 机、カメラ、原稿かな。1分300文字程度で伝える必要があるんだね。

T どうやって話したら良いでしょうか。

S ノートに、必要なことを書き出してみよう。

⇒自発的に活動できる。

例 筆者になりきってみよう。

⇒インタビュアー役と筆者役で会話することで、筆者の思いを探ることができる。